

流れ星でやって来た
公害怪獣ヘドラ！
街を森をふみつぶし
二大怪獣が大決戦！

ゴジラ対ヘドラ

《カラー作品》

監督 坂野義光
脚本 坂野義光
製作 田中友幸

主役 山根寿子
村松道平
佐々木幸子
佐々木幸子
佐々木幸子



ゴジラ対ヘドラ



■ものがたり

ヘドロで汚され一面にひろがった赤かつ色の湾内にボカリボカリ浮かんで消えていくあわ。そのあわの中で、ただ一つ、いつまでもはじけずに、かえってふくれあがるものがあった。それはオバQのように揺れ、のつぺらぼうな顔に無気味な双眼をつけていた。

それからまもなく、この海ぼうずのような怪物は駿河湾にあらわれた。この怪物によって巨大なタンカーも真つ二つに引きさかれた。この怪物こそ、ヘドロの中で生れた怪獣ヘドラであった。

海へ流れ出たヘドロを食べ、ヘドラはさらに巨大に進化していった。そして各地の湾内でもタンカーの事故がつづけて起った。しかし海での食糧不足をきたしたヘドラは田子の浦から陸地へと上ってきた。工業地帯のエントツの煙やガソリンを食べたヘドラはさらに成長し、ずんどうの二足獣のように立ち、上半身は五彩にかがやいていた。

エネルギー源となる多量のヘドロを体内にため、ジェット噴射による飛行も可能となり行動範囲もさらにひろがっていった。そしてはいせつする多くの硫酸ミストは、すべての生体に害をあたえていった。

地をはい、空をとび、建物をつきぬけ、水



中を行くヘドラ。最後には地球も食べられてしまうだろう。

この地球の危機に、一声高く濃霧の中からゴジラがあらわれた。ゴジラは、いまだかつてない強敵、ヘドラに立ち向かっていった。

この二頭の怪獣のいつはてるかも知れない死闘は東京湾から、富士のすそ野へと展開されていった。ゴジラの左眼はつぶされ、左手もヘドロの害でなかば白骨化してしまった。片眼片腕となっても、死力をつくすゴジラ、

矢野博士は巨大な電極板を作り、富士のすそ野へ運びこんだ。この電極板でヘドラを乾燥させてしまおうという作戦である。しかし組みあつた怪獣によって送電線が切断され、最後ののぞきもたれたかにみえた。

電極板へ追いあげられたヘドラへ向つて、ゴジラは最後の力をふりしぼって火をはきかけた。その瞬間、火災は電極板に感応して、ものすごい電流がヘドラの体内をつらぬいた。水じょう気を立ちのぼらせヘドラはみるみるくずれ落ち、後には泥の山がきずかれた。

全力を出しつくし傷だらけのゴジラは再び人間の前から姿を消していった――

●ヘドラ

隕石にくつつき、他の星からやってきた生物。体は、白色透明に輝く鉱物（ヘドリュウム）を中心に形成され、ヘドロの堆積の中で成長する。

■形態の変化

(1) 水中棲息期——オタマジャクシの形に似ており、体長1.0ミリより20メートルに至る。
(2) 上陸期——暗緑色のヌメヌメとしたハチュウ類に似て、ボロボロのような足と尾をもつ。体長30メートル。

(3) 飛行期——ゼラチン状の流体で、体長40メートル。ジェット噴射で飛ぶ。

■生態

食物は、水銀、カドミウム、硫酸等有害な鉱物で、ヘドリュウムの触媒作用で、硫酸の結晶を作り、多量の硫酸ミストを排泄する。眼を中心に、ヘドリュウムによって形成される神経組織があり、眼の上から赤色光線を噴射、また個体は粒子の集合で形を自由に変え、毒性の強いヘドロを飛ばす。

■スタッフ

製作 田中 友幸
脚本 馬淵 薫
監督 坂野 義光
特殊技術 坂野 昭慶
撮影 真野 陽一
音楽 真鍋 理一郎

■キャスト

矢野 徹 山内 明
敏江 俊恵
毛内 行夫 川瀬 裕之
富士宮 ミキ 柴本 俊夫
伍平 爺さん 麻里 圭子
ヘリのパイロット 吉田 義夫
若者 権藤 幸彦
ヘドラ 中沢 治夫
中島 春雄
中山 剣吾